

|         |                               |
|---------|-------------------------------|
| 氏名(本籍)  | 高橋敏之(岡山県)                     |
| 学位の種類   | 博士(芸術学)                       |
| 学位記番号   | 博乙第1,531号                     |
| 学位授与年月日 | 平成11年3月25日                    |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当                  |
| 学位論文題目  | 幼児の人物描画における発達的变化と頭足人的表現形式の変異性 |
| 主査      | 筑波大学助教授 博士(芸術学) 岡崎昭夫          |
| 副査      | 筑波大学教授 三田村 峻 右                |
| 副査      | 筑波大学教授 角井 博                   |
| 副査      | 兵庫教育大学教授 博士(教育学) 田中亨胤         |

### 論文の内容の要旨

幼児の造形活動の「現象としての把握」とその「現象の理論的説明」を長年にわたり追究してきた著者は、本論文において、過去1世紀以上にわたって多くの研究者が提起してきた幼児の描画の発達段階論の正当性を再検討し、さらに、幼児の人物描画やその典型とされる頭足人的表現形式に関する理論的諸説の問題点を見出した。その結果、著者は、本論文の研究目的として、ある特定の幼児の人物描画に関する縦断的な事例研究を通して、第一に幼児の描画活動の普遍性と特殊性に迫るために人物描画の発生とその変遷を正確に記述すること、第二に頭足人的表現の形成過程を正確に記述することによってその種の表現形式の生成原因を解明すること、の二つを導き出している。

本論文ではその研究内容が全6章によって構成されている。第1章「問題の所在と課題の発掘」では、先行研究における本研究の位置づけが論述されている。第1節では上述のような研究の背景と目的が述べられている。第2節では、多くの先行研究を精査した結果、幼児の描画活動に自然発生する人間を主題にした描画表現を「人物描画・人物表現・人物画」という用語に統一し、さらに、幼児の人物描画の最大の特徴である頭部・胴体・四肢を様々な組み合わせた不思議な表現を「頭足人的表現形式」(特に限定のないときには「頭足人型」)に統一した過程が述べられている。第3節では、本研究の対象として幼児の描画表現の中の人物表現を選んだ動機が記述され、次に、個々の幼児について時間を追って継続的に観察する縦断的事例研究の観察対象者・描画材料・観察期間・観察条件などが詳述されて、最後に、本論文の内容の全体的見取り図としての要旨が章・節ごとに簡単に紹介されている。

第2章「幼児の人物画に関する先行研究の検討」では、文献研究を中心にして先行研究が精査され、人物描画と頭足人型に絞って問題点が洗い出されている。第1節では、身体像、描画の発達段階、スクリブル、頭足人型、主知説などの視点から先行研究が考査され、発達心理学の世界的権威と言われる Piaget の研究が特に詳述されている。第2節では、Luquet(1927)、Бытотский(1930)、Eng(1931)、Read(1943)、Lowenfeld(1947)、Grözinger(1952)、Arnheim(1954)、Koppitz(1968)、Kellogg(1969)の9名の代表的な研究者が取り上げられ、人物描画の始まりの捕捉、頭足人型を記述する用語、及び、頭足人型の本質の説明、これら3つの視点から、それぞれの研究の問題点が探究されている。第3節では、井手則雄(1975)、Gambier(1976)、園田正治(1976)、Goodnow(1977)、長坂光彦(1977)、Brittain(1979)、鬼丸吉弘(1981)、林健造(1987)の研究が取り上げられ、前節と同様の視点からそれぞれの研究の問題点が探究されている。

第3章「特定幼児の人物画の発生とその発達の変化」では幼児の描画活動における人物表現の発生とその変遷

に関する研究がなされている。第1節では用語“scribble”とその訳語の妥当性が検討されている。第2節以降は、著者の長男・幼児Kの1歳から就学までの5年間に描かれた自発的な描画4157枚の資料に基づく実証的研究である。第2節では、言語発達と描画活動との関連性について、特定幼児Kの1歳1ヵ月から3歳1ヵ月までの描画作品1870枚が語彙の増加および品詞の出現との関連性から分析され、さらに描画活動と前文字図形との関連性が考察されている。第3節では、幼児Kの人物画の第1期（2歳6ヵ月9日目から2歳11ヵ月19日目までの24週間に描かれた502枚の描画の中の人物描画60枚〔1枚は頭足人で、59枚は人間頭部〕を対象）に見られる退行的現象を中心にしてその変容が記述され、描画表現には揺らぎがあることが明らかにされている。第4節では、表現の揺らぎの原因がテレビの視聴にあることから、テレビで放送された番組の中の似顔絵コーナーの視聴によって幼児が自分の人間表現に表現形式をどのように取り入れていくのかが明らかにされている。第5節では、Kの人物描画の第2期（3歳2ヵ月16日目から3歳7ヵ月24日目までの162日間に描かれた562枚の描画の中の72枚の人物描画を対象）における頭足人的表現形式の探索的試行が詳述されている。第6節では、幼児Kの人物描画の第3期（3歳11ヵ月2日目から5歳11ヵ月21日目までの2年20日間に描かれた1555枚の描画の中の57枚の人物描画を対象）の変容過程が取り上げられ、特に頭足人的表現形式を離脱した後のプロフィール表現とレントゲン描法について考察が深められている。

第4章「頭足人的表現形式に関する先行研究の批判」では、今日まで頭足人的表現形式の理論的説明として提唱されてきた見解・学説に対する著者の包括的視点からの批判的見解が示されている。第1節では、頭足人的表現形式が、先天的な形態記憶であるとする先天的記憶説、視覚と運動感覚による自己認識によって描かれるとする自己中心説、幼児が創作した人間の象徴・表象・表徴であるとする象徴表現説が、それぞれ再検討されている。第2節では、「子供は知っていることを描くので、見たことを描くのではない」とする主知説の記述と解釈に関して論述されている。第3・4節では、頭足人的表現形式を主知説によって説明している研究者の記述が詳細に検討されている。第5節では主知説を批判した代表的研究者であるArnheim(1954)が提唱した表現未分化説が再吟味されている。

第5章「頭足人的表現形式の構造と本質」は、前章における幼児の頭足人的表現形式に関する諸説への批判をふまえて、著者の自説が提示されている。第1節では、幼児Kの頭足人的表現形式で描かれた人物画がすべて観察され、その表現形式の発生から消滅までの発達的変化が変異性という概念、つまり脳の内臓感覚・体性感覚・特殊感覚などの働きが、視覚的情報との関連の中で、人物描画に影響を与えるという見解が示され、頭足人的表現形式の類型化理論を確立するために、Osterrieth & Cambier(1976)の研究を発展させて、頭・胴・脚・腕の組み合わせによる新しい分類用語も提起されている。第2節では、幼児が同一の時間帯に同一の用紙または連続的に用紙を使用してタイプの違う頭足人的表現形式を連続描画する現象に焦点が当てられている。まず、先行研究からこの現象がどのように把握・説明されているのかが示され、次に、幼児H(女兒)が描いた家族画を事例として、対象の重要度によって描き分けをする結果、頭足人的表現形式の現象が発生することが論述されている。第3節では、「頭足人的表現形式の本質と脳から見た人体説」の主題のもとに著者の到達した見解と仮説が表明されている。著者の「脳から見た人体説」によれば、胴体のない頭足人的表現形式の本質は、脳が捉えている自分の姿が人物描画に大きく参与することによって描画欲求が発動され、それに視覚的知識や言語的知識が加味されたものである。

第6章「研究のまとめと課題」では、幼児の人物描画における発達的変化と頭足人型の変異性について、本論文のまとめと残された課題が述べられている。第1節では幼児Kのスクリブルの発生から人物描画に至るまでの描画活動と人物画発生後の変容過程に関する縦断的事例研究が要約され、第2節では、幼児の頭足人型の構造と本質に関する総括的な考察がなされ、最後に、著者は、頭足人型における縦断的事例研究が今後とも必要とされることを強調するとともに、脳から見た人体説に関する自身の仮説が大脳生理学あるいは脳科学における今後の研究の進展によって検証されることを期待している。

## 審査の結果の要旨

本論文は幼児期から青年期に至る児童美術に関する過去1世紀の研究成果をふまえてなされたものである。この分野に関する研究は、イギリスのCooke(1885)の論文において最初に児童の描画の発達段階説が示され、19世紀末にヨーロッパで開始された。それ以後、芸術の分野では、近代美術における原始美術への関心の高まりに呼応して原始美術と児童美術の類似性が注目され、児童の描画の表現性を大人のそれと同等の価値を認める近代の芸術教育の思潮が産み出された。その一方で、心理学の分野では、今世紀の初頭から児童の描画の形態分類による発達段階に焦点を当てた発達心理学的研究がなされ、1940年代からは児童の描画や絵画に反映された情緒や概念に基づいて性格を診断する臨床-投影的な臨床心理学的研究も現れはじめ、さらに、1950年代からはゲシュタルト心理学の興隆に触発されて視覚と思考過程が密接な関係を持つという「知覚の体制化」の観点から児童の描画が研究対象となった。この知覚心理学的アプローチは児童の描画を対象とした実験的調査に基づいて描画と思考の密接な関連性を提起する最近の20年間の認知心理学的研究に引き継がれ、さらに医学の分野において脳内に形態認知の部位を確定して描画のメカニズムを探求する脳神経科学的研究も現在なされている。本論文は、このような研究の展開を背景にして、児童の描画の芸術的価値を基本的に認める立場を保持しながらも、主として知覚心理学と認知心理学のアプローチに基づき、最近の脳神経科学的視点も考慮に入れて、幼児の人物描画の研究に取り組んだ労作である。

本論文は、幼児の人物描画に焦点を絞って、1世紀にわたる児童の描画に関する研究文献を丹念に渉猟し、その俯瞰と批判によって研究主題を設定している。著者は、2・4章において、幼児の人物描画と頭足人的表現形式とに関連する文献を精査した結果、縦断的研究がきわめて数少ないことを認識し、主にある一人の特定の幼児の1歳から6歳までの期間における人物描画の発達の变化(第3章)と、3歳の時期に集中して発現した頭足人的表現形式の発生から消滅までの変異性(第5章)に焦点を絞った二つの研究主題を引き出している。このことは著者の問題意識の的確さとその研究態度の真摯さを如実に示すものと評価されてよい。

著者は、大学において長年にわたり幼児教育学専攻の学生に対して幼児の造形に関する講義を担当してきた関係から、著者自身の長男・幼児Kの就学までの5年間における自発的な描画4157枚を収集した。これらの描画は一枚ごとに制作年月日が記されるとともに、制作の時間的経過に従って番号が打たれている。多数の幼児の描画を対象とした横断的研究は数多いが、特定の幼児の長期間の描画を対象にした縦断的研究はきわめて少ない。著者の研究資料の収集は、日々の日誌的な蓄積を要する緊張した5年間を想像すれば、誰しも容易になし得ない敬服に値する活動である。収集された幼児の描画はそれ自体でも資料的価値を有するものであり、それらの描画には年月日に加えて累積番号が付されていることは、発達の变化の時系列を実証する上で、データベース化をはかる基礎資料として貴重である。

就学前の幼児期の描画の発達段階は幼児教育に携わる者なら誰もが知らねばならない基本的知識に属しているが、幼児期の描画の様相を横断的な現象として提示しえても、その現象の理論的説明に関して研究者間に一致した説を見出すことは、多数の幼児における遺伝と環境の決定要因が無限であることを考慮すれば、困難である。著者は、幼児Kの1歳1ヵ月から3歳1ヵ月までの描画作品1870枚に見られるスクリブルや各種の図形の発生の時系列をふまえて、第1期の人物描画60枚に見られる退行的現象、第2期における72枚の人物描画における頭足人的表現形式の探索的試行、第3期57枚の人物描画の変容過程などを詳細に考察することによって、人物描画の発生とその変遷の全貌を本論文において縦断的に提示することに成功している。

次に、著者は、幼児Kの頭足人的表現形式の人物画をすべて観察して、その表現形式の発生から消滅までの発達の变化における変異性を見出し、頭・胴・脚・腕の組み合わせによる新しい分類概念を提起し、頭足人的表現形式の類型を理論化している。さらに、幼児が同一の時間帯に同一の用紙または連続的に用紙を使用してタイプの違う頭足人的表現形式を連続描画する現象、あるいは、幼児H(女兒)が描いた家族画を事例として対象の重

要度によって描き分けをする結果、頭足人的表現形式の現象が発生すること、などを提示している。このような頭足人的表現の形成過程の詳細な解明は、これまでに見落されていた論証モデルを明らかにすることにおいて、意味ある成果を得ている。

著者が幼児の人物描画に関する諸説の問題点のなかでも特に多くの紙面をさいて考察の対象としたものに主知説がある。これは、Luquet(1927)の著書『子どもの絵』によって衆知にされた説で、「子供は見えるように描くのではなく、知っていることを描く」という「知的リアリズム」期（5歳から8歳まで）の描画（地中の芋を描くようなレントゲン描画）に関する理論的説明であった。それ以後、この説明は、次第に拡大解釈されて8歳以下の幼児の描画すべての説明として適用され、Piaget & Inhelder(1966)によって発達心理学の分野において通説化する事態となった。著者は、こうした通説に対して、人物描画の退行的現象や変容過程、頭足人的表現形式の探索的試行や変異性、あるいは頭足人的表現形式の連続描画における対象の重要度、などの研究結果に基づいて、幼児の描画における主知説の誤謬を実証した。

本論文は、幼児の人物描画に関する知覚心理学的アプローチから出発して、描画が思考の産物であると同時に描画が思考を促進するという認知心理学的見解に達している。認知心理学的には、刺激と反応との間に介在して「選択的励起」（感覚受容器から大脳中枢へというボトムアップ過程）と「探索的照合」（大脳中枢から感覚受容器へというトップダウン過程）とを相互になす有機的生命体としての幼児の内的要因が指定される。著者は、幼児は我々が考えているほどに未成熟・未分化ではなく、むしろ自分が見て知って覚えている視覚的心像をもとに幼児は描画するという立場から、「頭足人的表現形式の変異性」、その生成要因としての「脳から見た人体説」、という二つの研究成果を得ている。これらの成果は、認知心理学による近年の実験結果を考慮すれば、おおむね妥当であると推察される。

すなわち、前者の研究成果に関しては、ものの対象性の認知が感覚入力とイメージや知識の記憶痕跡（エンゲラム）との「内的相互作用」の結果であり、そこには予期的図式（仮説としての見方の枠組み）が探索によって修正・変容を無限に繰り返すという「知覚循環」機能が実験的に確証されていることからすると、頭足人的表現形式の発生から消滅に至る変容過程への一定の合理的説明が可能となる。次に、後者の研究成果に関しては、ものの外在性の認知とは、脳内に全体を構成するデータ要素のリストとしてのイメージがあり、その「脳内のイメージ」が外界の対象上に投射される結果そこに定位されることを言う。つまり、認知の外在性は「脳内処理」と「対象認知の外界投射・定位機能」依拠しているものであり、頭足人的表現形式の生成要因として、幼児の人物の「視覚的心像」が脳外に投射され、対象として定位されたものが描画上にしるされるとすれば、著者の仮説には、人体を見る脳内の部位に議論が残るとしても、一定の合理性が認められる。この仮説の立証は広義には認知科学や脳科学と呼ばれる最先端の諸分野の今後の知見を待つしかないが、目は光に関する情報の入り口に過ぎず脳内の情報処理の一つが描画であるとする最近の脳神経科学的見解に著者が接近していることは興味を引きつけるところである。

以上の諸点を考慮すると、著者が本論文で設定した二つの研究目的はほぼ達成されたと言ってよい。本論文の全体評価としては、特定幼児を対象とした日常生活の描画行動の観察記録に基づいて、人物描画の発達的変化の全容を解明し、頭足人的表現形式の変異性を見出し、その種の形式の生成要因の理論仮説を提示することにより、人類のイメージの発生とその根源に迫った力作であると言える。さらに、1歳から3歳までの期間における描画活動と前文字図形との関連性、2歳半時期にテレビの視聴によって引き起こされた人物描画の退行現象、という本論文における二つの発見は将来の二つの研究課題を指し示している点で先見的である。前者は幼児の描画と初期の書字行動と間に想定される関連性の詳細な探究に道を拓く研究であり、後者は認知論的な限界を補完する社会-文化的射程に幼児の描画研究を導く可能性があるため、国内外の今後の幼児の描画研究の進展に対して本論文の多大の貢献が予想される。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。